



独立行政法人 国立病院機構

四国子どもとおとなの  
医療センター

## アートプロジェクト

—今月のショット—

ボランティア室に匿名で  
届けられた綺麗な小石



亡くなった赤ちゃんの  
ためのベビー服

2016年 7月号

### —院内の小さな声から—

ボランティアUさんの作ってくれるベビー服は一枚一枚デザインが違います。全て手作り手縫いです。2年前からこつこつ作っては持って来てくれていたベビー服。今日、ソーシャルワーカーのFさんを通じて看護師さんにお届けすることが出来ました。このベビー服は病院で亡くなった赤ちゃんのためのものです。着せる為のものではなく看護師さんがそっと小さな赤ちゃんを包んであげる為のものです。旧香川小児病院NICUの師長さんが続けていた取り組みをUさんが引き継いでくださったのです。Uさんは言います。「これで納まるような気持ちではないと思うんや。お母さんは。ほんまに苦しくて、悲しくて。でもな、ほんのちょっとでも、その子が存在したことを確かめてあげたいというか。その子も、お母さんも頑張ったことをお医者さんや看護師さんはちゃんと見てましたよって。伝えられたらええと思って。」Uさんはいつも試行錯誤しています。「夏らしく、涼しい素材をつかってみた」「レースも裾に付ける分にはちくちくせんくてええやろう」その行いは「いのち」を慈しみ尊重する行為に他なりません。



みた人がやさしい気持ちになればと思い描きました。

作家名：尾花 恵

### —小さな戦士たち—

2013年に病院が開院する直前、クウネルという雑誌の記者Sさんが東京から取材に来てくれました。Sさんは新病院に取り入れられるアートの取材に来たのですが、いろいろ話しているうちに「その古い病院が見たい」と言い出して、解体寸前の旧香川小児病院に入り込みました。足下どころがっているがらくたを飛び越えながら6病棟にたどり着くと、がらんとした病棟の壁に描かれた楠の壁画の前に立ちました。そしてつぶやくように「ぎりぎりセーフで「この子」に会えてよかった」と言いました。その翌週、壁は取り壊されました。Sさんはフリーライターなので書籍や旅先で買い求めた小物などを時々病院に送ってくれます。もちろん、ニッチの中に入れてプレゼントにしたり、本棚に並べて患者さんに読んでもらう為です。今回もたくさんの絵本や書籍を送ってくれました。そしてメッセージにはこんな風なことが書いてあるのです。「私を育ててくれた「この子」たちが、今度はどこかで誰かの人生を豊かにしてくれますように。」「この子・・・」Sさんにとって「もの」は「もの」ではなく人格を持った「大切な愛しい存在」なのだと思います。ものづくりボランティアのメンバーさんも、「キャー、なに「この子」かわいい！」と、送られて来たぬいぐるみやどんぐりや石ころを指差していることがあります。その時、それはただの「ぬいぐるみ」や、「どんぐり」や、「石ころ」ではないのです。患者さんを元気づける。という使命を持って病院に送られて来た小さな戦士なのかもしれません。今日も朝、ボランティア室の扉を開けるとテーブルの上に綺麗な紙袋に入ったつやつやした石ころがたくさん置いてありました。メッセージはついていません。ボランティアさんなのか、職員さんなのかわかりません。でも言葉はなくてもそこになぜ「その子」たちがいるのかはわかっています。「この子」たちには使命があるのです。「この子」たちをメッセージカードと一緒に透明の袋に入れてスタンバイ。コンシェルジュさんがニッチの中に入れる贈り物を取りに来たようです。そろそろ出番です。「よろしく。小さな戦士たち」